

はじめに

古代の尾張氏はその居地を東国への要地に占め、三種の神器の一つである草薙剣を奉斎し、多くの后妃伝承をもつ。また、国造としては異例の「連」姓を名乗り、『新撰姓氏録』によれば物部氏に次ぐ多数の同族を擁する氏族である。

尾張氏研究の史料としては、まず尾張氏系譜をのせる『先代旧事本紀』所載の「天孫本紀」と、尾張氏の側から記された『尾張国熱田太神宮縁記』とが主要なものとしてあげられよう。また、『古事記』・『日本書紀』等にも尾張氏は登場するが、これらは中央の側の史書であり、中央と尾張氏とが直接に関係したときにのみ史上に尾張氏が登場するため、おのづから断片的にならざるをえない。その他、『新撰姓氏録』には畿内の尾張氏としての同族が記されており、また『続日本紀』その他の国史や『寧楽遺文』等にも尾張氏は散見される。

尾張氏についての研究は、従来かなりおこなわれているが、史料的な制約もあり、推論の上に推論を重ねざるをえないのが現状である。

本稿では、今までの尾張氏研究の成果を踏まえ、諸説あるところは検討しつつ、尾張氏の全体像に迫ってゆきたい。

第一章 尾張氏の歴史的発展と基盤

1. 尾張氏の本拠

尾張氏の本拠については、古くは大和国の葛城地方にあったとする説があり、本居宣長は『古事記伝』においていち早くこの説をとえ、また太田亮氏(1)や高群逸枝氏(2)などの近代諸学者の説もこれを踏襲している。葛城本拠説は最近になるまでは定説の感があり、たとえば重松明久氏の「尾張氏と間敷屯倉」(3)という論文にみられるように、尾張氏は葛城から尾張へと移り住んだという大前提で論を展開するという状態であった。(尾張氏の本拠がはたして葛城地方にあったのかどうかについての検討はなされていないのである。)

葛城本拠説は、『先代旧事本紀』(以下『旧事紀』という)所載の「天孫本紀」の尾張氏系譜の前半部分に、尾張氏と葛城氏ないしは葛城という地名を負うものとの通婚関係が顕著であることや、『日本書紀』(以下『書紀』という)の神武天皇即位前紀戊午年九月条の「高尾張邑、或本云、葛城邑也」と、同じく己未年二月条の「高尾張邑、(中略)因改號其邑曰葛城。」という記事から、葛城地方が古くは高尾張と呼ばれていたことなどを論拠とする。

この葛城本拠説に対して、近年新井喜久夫氏(4)や松前健氏(5)らは、尾張氏の本拠はもともと尾張にあったのではなかろうかと考えられた。すなわち、葛城本拠説を支える系譜の前半部分は、崇神天皇以前のいわゆる闕史八代と相応し、その闕史八代は天皇の和風諡号の検

討などからかなり後世的な代物であることが、津田左右吉以来、学界ではかなりはっきりとして来たことであり、尾張氏系譜の前半部分も後次的加上の可能性が強いとされたのである。また、尾張氏系譜そのものも崇神朝の乎止与命を境として前後に二分できる（乎止与命より前は葛城との関係が強く、乎止与命以後は尾張国との関係が強いことと、乎止与命は先代の誰の子か系譜には記されていないこと）ので、本来は尾張地方と関係の深い系譜の後半部分が存在し、その後大和朝廷と関係をもった後に葛城地方に尾張氏が居留地をもつようになり、葛城との関係が系譜の前半部分に加上されたとするのである。（系譜にこのような加上がされなければならなかった理由としては、尾張氏の始祖である火明命(6)（天孫として『古事記』『書紀』の神代に登場する）と乎止与命とを結びつける必要からと考えられる。）松前氏は尾張氏の葛城の居留地を朝廷と尾張本国とを結ぶ出先機関のようなものではないかと考えておられる。葛城地方には葛城氏や鴨氏の奉斎神は多くみられるが、尾張氏はこの地に有力な社さえ一つも持てない状態であり、葛城地方で広大な土地や多くの部民を従える強大な豪族であったとはとても思えないというのである。

尾張氏の本拠を葛城地方にもとめるか尾張地方にもとめるかは、尾張氏が元来中央豪族であったのか、地方豪族であったのかを決定する重要な問題である。尾張本拠説は、定説化されつつあった葛城本拠説に再考を促した点で重要な指摘であると言わねばなるまい。

このような尾張本拠説に対して葛城本拠説の側から反論されたのは服部良男氏(7)である。尾張氏が新井氏のいわれるように県主（年魚市県）として魚貝貢進を行ない、大和朝廷の内廷に関係したものであり、年魚市県の祭祀共同体の首長から国造へ成長したものと考えるのであれば、神社をめぐる村々（邑）の共同体的関係の根強さは、三種の神器の一つを奉祀することとあいまって、律令制権下に問題となるべきものであるはずだが、そうした処置（神郡の設置＝筆者注）をとられていないことは、逆にみれば、尾張氏の在地性が特別に強固でなかったと考えられ、尾張氏の本拠は尾張地方の他に求めるべきであるとされた。尾張には尾張連のほか丹羽臣（多臣系）・知多臣（和爾系）・中島連（鴨県主系）がそれぞれ丹羽郡・知多郡・中島郡に割拠しており、これらの氏族がそれぞれ別系統の祖をもち、尾張氏と同祖関係を形成するにいたらなかった事實は、服部氏の指摘をうら付ける。尾張氏は多くの后妃伝承をもつ氏族であるだけに、尾張国内におけるこのような尾張氏の在地支配の脆弱さは、果たして尾張国を本拠としたのかを疑わせるのである。だからといって葛城が本拠かという点、前述のように葛城地方には有力な尾張氏関係の神社すらない状態であり、ほとんど痕跡のない葛城地方に尾張氏の本拠をもとめるのは無理であろう。尾張国は肥沃な濃尾平野の大部分を占め、かつ軍事的にも重要な位置（後述する）にある。このように尾張国は強力な勢力を養成させるだけの素地は充分あったと考えられること、また後述するように尾張氏は海部と深いつながりがあったらしいこと（内陸にある葛城と海部とは直接に関係をもつはずがない）などから、ここでは尾張氏の本拠は、尾張氏が国造（後に郡司）として支配していた尾張地方と考えたい。ただし、葛城地方とも何らかの関係があったらしいことは充分考えられ、あるいは松前氏の言われるような出先機関があったのかもしれない。

大和国にはまた山辺県があり、山辺県主は尾張氏の同族である。山辺地方にも尾張氏の出先機関を求めるべきであろうか。

2. 尾張氏の尾張国内での居所

尾張氏の本拠については、前節で述べたように史料的制約もあって、いまだ葛城とも尾張とも決定しかねる状態であるが、少なくとも奈良時代には尾張氏は尾張国の郡司(8)となっていたのであり、本節では尾張氏がどのように尾張国において勢力を養い尾張国を支配していったのか、また尾張国において尾張氏が活躍した時期はいつ頃からであったのかを探ってみようと思う。(葛城本拠説の立場であってもしいずれは尾張に移住したと考えられるのであるから、尾張国における尾張氏を考えることは両説に共通する問題であると考えられる。)

奈良朝期の尾張氏の居所は、熱田神宮の鎮座する愛知郡にあったと考えられるが、尾張氏の従来の研究においては、尾張氏はもともと熱田を本拠としたのではなく、尾張国内の別の地域から熱田に移り住んだものと考えられているのである。

『尾張国熱田太神宮縁記』(以下『熱田縁記』とする)に「當郡氷上邑有桑梓之地。」とあり、「桑梓」とは「ふるさと・故郷」の意味であることから、太田亮氏(9)は尾張氏が愛知郡氷上邑より熱田に移ったと解釈されたのである。この氷上邑には氷上姉子神社(10)(尾張国造の祖あるいは尾張氏の女として『古事記』・『書紀』にも登場するミヤズヒメを祭る)が鎮座することからも尾張氏とこの地の関係の深さを感じとることができよう。

ところが、これに対して新井氏(11)は、この『熱田縁記』は信頼性の低い史料と考え、この記事も氷上姉子神社が熱田神宮の摂社であったことに起因するとされ太田氏の説を否定されたのである。

新井氏は、尾張国内での尾張氏の権力確立過程をみるにあたって、ひとたび文献から離れ、考古学の側から愛知郡周辺の新墳の消長を検討された。その結果、尾張氏は熱田の東方のみならず大地に発し、五世紀末に熱田台地に移り、ここに長径150メートルの断夫山古墳(五世紀末・尾張地方最大)および68メートルの長径を有する白鳥古墳(後期古墳としては当地最大級)を築造し、熱田神宮を奉斎したと考えられたのである。

断夫山古墳・白鳥古墳が果たして尾張氏の築造になるかの証明はできないが、もし尾張氏の墳墓であったとすれば、尾張氏の故地を瑞穂台地に求めた新井氏の説は有力になってくる。(私も尾張地方最大の古墳は尾張国造であった尾張氏の墳墓と考えたい。熱田の地にそれがあることはこれを裏付けと思う。)

ところで新井氏は前述したように氷上の地に尾張氏の故地を求めることに反論されたわけであるが、私は氷上から瑞穂台地に移動し、再び熱田に移ったのではないかと考えたい。新井氏は『熱田縁記』が『書紀』の記述を利用している点を指摘され『熱田縁記』の信頼性の低さを否定の論拠とされたわけであるが、中央と関係する記事はともかく、中央と関係な

い尾張氏のみに関係する記事までも同等に疑うべきではないと考える。氷上の地が尾張氏の桑梓の地であったとする『熱田縁記』の記事は、政治的にほとんど影響をもたない記事と考えられ、故意に作られたものとは思えない。尾張氏だからこそ知る尾張氏に代々伝わる伝承であったとみなすべきであろう。

氷上が尾張氏の故地であると考ええるもうひとつの理由は東海市の兜山古墳の存在である。兜山古墳は前・Ⅲ期初頭の径四五メートルの円墳であり、氷上姉子神社から二キロメートルの至近距離に立地する。この兜山古墳の築造氏族が澄田正一氏(12)の言われるように、知多半島沿岸に土着した漁業専門社会の支配者であり、新しい政治体制との関係を深めて、名古屋台地に根拠地を移したと考えられるならば、氷上の地から瑞穂台地へ、さらに熱田へと尾張氏がその居所を移したと考えることは許されよう。

このほかにも重松明久氏(13)のように尾張氏の故地を氷上以外に求める説もある。重松氏は『書紀』宣化元年五月条に「蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連、運尾張国屯倉之穀」とあることから、尾張氏は入鹿・間敷の両屯倉を管理するために入国（重松氏は前述したように葛城本拠説をとる）してきたと考え、間敷屯倉の所在を尾張氏の祖とされる建稲種命をまつ内津神社の鎮座する春日部郡と推定され、ここを尾張氏の尾張国における最初の居地と考えられた。これに対して新井氏は、内津神社の祭神が建稲種命だとする『熱田縁起』の記事は鎌倉初期につくられたものであると反論されている。春日部郡と愛知郡の古墳の関係はいまひとつ不明確であり(14)、古墳の消長からははっきりとしたことはいえない。私は尾張氏と海部とのかかわりを重視したいので、前述の氷上から熱田へ移ったという説をとりたい。尾張氏は後述するように継体天皇大和入りに一役買っていたらしく、当時の尾張地方では最有力豪族であったようで、単に屯倉管理のみを行っていたとは考えられない。このころには尾張氏の居所はすでに熱田にあり、一族を屯倉の管理のために派遣したとみるべきであろう。（宣化朝に尾張国に入国したと考えると、尾張氏と継体天皇との関係(15)が説明できなくなる。）

さて、前に尾張国には尾張連以外に丹羽臣・知多臣・中島連らが割拠していたことを述べたが、尾張氏とこれら小豪族とはいかなる関係にあったのであろうか。奈良朝以後の史料に尾張連・尾張宿祢を名乗る者が愛知郡のみならず春日部郡・中島郡・海部郡等の郡司になっているのが散見される。また山田郡の人で小治田連薬ら八人が尾張宿祢を賜姓されたように、山田郡もまた尾張氏一族が支配していたとみることができる。また和爾系の知多臣が勢力を握っていた知多郡にも尾張氏と同祖関係にあると考えられる伊福部大麻呂の名がみられ（伊福部氏については後述する）、知多郡にも尾張氏の勢力は及んでいたようである(16)。尾張氏はこれら小豪族と同祖関係を結べるほど尾張国内での在地支配が強固ではなかったとも言えようが、尾張国全域に尾張氏一族を派遣し、在地小豪族を監視できるだけの力はあったようである。

第二章 尾張氏の職掌

尾張氏が尾張国造としての職掌以外に、大和朝廷においていかなる職掌をうけもっていたかは、尾張氏が国造には珍しい「連」姓を有する（他には壬生連があるのみ）ことと相まってしばしば問題にされる。

尾張氏の職掌についての論議はすでに出つくした感があるが、尾張氏の全体像を把握するにはその職掌をさけて通ることはできないので、ここでは主に先学の成果にもとづいて論じてみようと思う。

大化前代における尾張氏の職掌に関する直接的な史料は皆無に等しく、従来尾張氏の同祖氏族の分析によりその職掌を考えていく方法がとられている。

1. 内廷関係氏族としての尾張氏

尾張氏と同祖関係をもつ氏族は、表①に示したように、『新撰姓氏録』（以下『姓氏録』とする）に伝える限りで43氏に達する。物部氏に次ぐ多数の同族を有するわけであり、尾張氏がいかに多くの同祖氏族を京畿にもっていたかがわかる。

表①をみてまず気がつくことは、内廷関係の小氏族が多いということである。1～3は宮城十二門のひとつ伊福部門を守っていた氏族であり、同様に10～15は丹治比門を、32は若犬養門をそれぞれ守っていたいわゆる宮城十二門氏族である。佐伯有清氏によれば、宮城十二門氏族は本来の護衛を行なう軍事的部としての職掌のほかに、膳部的部として内廷と深くつながりがあったらしい。

これらのほかにも表①には湯母竹田連・石作連・大炊刑部造・水主直・工造・笛吹（連）・三富部などの内廷関係氏族がおり、計20にもおよぶ。この事実は尾張氏が内廷に深いかわりをもっていたことをうかがわせる。尾張氏が国造としては異例の「連」姓を名乗るのはその職掌が内廷伴造的な性格のものであったためと考えられる（17）。

2. 海部との関係

再び表①をみてみよう。但馬海直・津守宿祢・網津守連・凡海連など海部に関係する同祖氏族がみうけられよう。（『旧事紀』の尾張氏系譜にも津守連・海部直・大海部直などが同族となっている。また尾張氏には崇神妃大海媛がおり、これもまた尾張氏と海部とのかかわりをうかがわせる。）

『熱田縁記』には「以海部氏為神主。海部是尾張氏別姓也。」という記事がある。これは、熱田神宮の摂社のひとつである氷上姉子神社について述べている一節であるが、ここで明確に海部は尾張氏の別姓だといっているのである。この伝承は、前章で述べた氷上の地が尾張氏の故地だとする伝承と同種の価値のある尾張氏代々にうけつがれた伝承とみることができよう。そしてこの伝承は、『姓氏録』や『旧事紀』の分析とも一致している点で信憑性

はかなり高いと考えられる。

このほかにも尾張国に海部郡があることや、愛知郡・葉栗郡など尾張各地に海部とかかわりのある氏族が分布していることなども、尾張氏と海部との深いつながりのあらわれとみなすことができよう。また、尾張氏が奉斎する熱田神宮や氷上姉子神社は、現在でこそ内陸に位置するが、往時はどちらも海に突出する地形の先端であつたらしく(18)、海に深いかかわりのあつた神社と考えられており、海部とのかかわりを一層感じさせる。

これらのことから、尾張氏の職掌のひとつに海部があつたことは認められると思う。しかし、これを発展させて尾張氏の同族の分布から瀬戸内海や日本海でも尾張氏が海部の統率者として制海権をもっていたと考えること(19)には慎重でなければならない。瀬戸内北岸に尾張氏の痕跡を残す地名や神社名があることや、日本海沿岸に尾張氏の同族が見出されることなどから、尾張氏の海部としての勢力を過大評価する説があるが、もし、尾張氏が瀬戸内海とか日本海という大陸と大和朝廷とを結ぶ重要な海域を支配したのであれば、大和朝廷の朝鮮出兵に尾張氏が海部として何らかの役割を担った伝承を残してもよいはずである。にもかかわらず、紀氏などの場合(20)と違い何も伝承がないのである。したがって尾張氏の海部としての勢力範囲は伊勢湾のあたりが中心でせいぜい東国への航路となる遠州灘のあたりまでではなかろうかと考えるのである。

さて、尾張氏の職掌について尾張氏の同族の職掌から類推を試みてみたのであるが、ここでこれら尾張氏同族の多くが擬制的同族関係を結ぶ直接の対象となった尾張氏の始祖で火明命の性格について考えてみたい。

火明命は『古事記』・『書紀』の天孫の誕生の叙述のところに登場する。『書紀』・『姓氏録』・『旧事紀』等の記述をみるかぎり、火明命の直系の子孫は尾張氏であると当時は意識されていたか、あるいは火明命を祖とする氏族のうちで尾張氏が最有力であつたことがわかる。

『播磨国風土記』 飴磨郡の条に次の一節がある。

昔 大汝命之子 火明命 心行甚強 是以 父神患之 欲遁棄之 乃 到因達神山
遣其子汲水 未還以前 即発船遁去 於是 火明命 汲水還来 見船発去
即大瞋怨 仍起風浪 追迫其船 於是 父神之船 不能進行 遂被打破

火明命を大汝命としている点で『古事記』・『書紀』の記述と違うが、この記事から船の航行を自由に繰ることができる海神としての性格を火明命に見出すことができる。火明命は字義通り船の航行に不可欠の灯台の火の明かりの神格化と考えられよう(21)。

このように考えることが許されるならば、火明命は海部に奉斎されるにふさわしい神となり、さきの尾張氏の職掌を海部の統率者と考えたことが一層補強されるのである。

尾張氏は職掌の上では内廷と海部とにかかわりをもっていた。新井氏は、尾張氏は伊勢湾の海部の統率者として内廷膳部に魚貝類を貢納し内廷とのかかわりを密にしていたと考えられている(22)。従うべき見解だと思う。尾張氏が多くの后妃伝承をもつのもこのようにして内廷との結びつきを深めたからと考えることもできる。

尾張氏が前述したように朝鮮出兵にかかわる伝承をもっていないのは、当初は海部を職

掌としていたものが、内廷と関係を深めるにつれて、もっぱら内廷伴造的性格を強め、海部としては国造として居する尾張国のあたりすなわち伊勢湾周辺を支配するにとどまったためではなかろうか。尾張国造は海部の管理をも職掌とし、前述した葛城の出先機関において内廷伴造としての役割を果たしていたのかもしれない。

3. 律令国家における尾張氏の職掌

尾張氏は律令体制においては本家は尾張国の郡司になっていたのであるが、中央においてはいかなる職掌をもって出仕していたのであろうか。

表②は、尾張地方の郡司及び後宮女官を除く律令国家の尾張氏の人々を整理したものである。

表の2～4と7は皇后宮職・中宮職とかかわりをもち、また10・15・17・24などは東大寺関係の下級官人となっている。また、薬菌使・木工長上工・内兵庫正・主油正など内廷関係の職掌をもつものがみられ、尾張氏は大化前代から伝統的に内廷関係の職掌をうけていたようである。

しかし、大化前代では多くの后妃を出した尾張氏も表②を見て明らかなように、奈良朝ではほとんど下級官人にとどまっているのである。

さて、表②には加えていないが、後宮女官として尾張宿祢小倉と尾張宿祢若刀自の二人がいる。この二人は命婦として仕え、小倉は後に尾張国造に任ぜられ従四位下まで進んだ。若刀自も光明皇太后周忌御斎供奉の功により従五位下に叙せられている。尾張氏の中で最高位に進んだ二人がいずれも女性で後宮と関係があったのは注目される。このような後宮と関係があったのは注目される。このような後宮とのかかわりは、多くの后妃伝承を有することから伝統的なものと考えられる。内廷とのかかわりや采女を入れることによって後宮との関係を深めたのであろう。

さて、再び表②をみてみよう。「宿祢」姓が少ないことに気づかれるであろう。尾張宿祢東人と尾張宿祢弓張の二例があるのみである。尾張連は天武改姓のとき宿祢を賜ったわけであり、尾張国の郡司の多くは尾張宿祢を名乗っている。しかるに、表②からわかるように中央に仕えた尾張氏には宿祢姓がほとんどいないのである。

尾張氏が中央政界とのかかわりで尾張と葛城地方（出先機関）との二か所に居住するようになったことは前述したが、宿祢姓がこのように尾張国の尾張氏に多い原因はこのことにあるのかもしれない。すなわち、尾張氏が尾張国のいわば本家と葛城の傍流とに別れ、当初は互いに尾張連を名乗っていたものが、天武改姓のとき本家だけに宿祢賜姓があったためと考えられるのである。中央官人で宿祢姓をもつ前述の二名や命婦の小倉・若刀自などはいずれも尾張氏としては高位にのぼったものたちであり、尾張氏本家の伝統的な力をうかがわせるのである。

第三章 大和朝廷の東国経営と尾張国・尾張氏の役割

1. 尾張国の重要性

『続日本紀』和同元年三月条に次のような記事がある。

勅。大宰府帥大貳。并三關及尾張守等。始給廉仗。其員。帥八人。大貳及尾張守四人。三關國守二人。

ここにいう廉仗とは、大和朝廷にとって軍事的に重要な地の在外官につく護衛官のことであり、この記事にあるように大宰府や三關（鈴鹿・不破・愛発）に廉仗を給うのは当然のことである。では、なぜここに「尾張守」が加えられているのであろうか。しかも、この記事では尾張守は大宰大貳と同じく四人の廉仗を給わっており、数字の上で考えるならば二人しか給わっていない三關の国司よりも朝廷から手厚く保護されていたらしいのである。

考察にはいる前に一言ことわっておくが、この記事に出てくるのは尾張守すなわち中央から派遣された国司であり、直接には尾張氏とかかわる存在ではない。（ここに出てくる尾張守は佐伯宿祢太麻呂であろう。）しかし、尾張氏を考えるにあたって、その基盤である尾張国が大和朝廷にとっていかなる存在であったかを検討することは必要不可欠と考えられるのである。

この記事から察せられることは、尾張国が大和朝廷にとって軍事的に極めて重要なポイントと考えられていたらしいことである。

尾張国はその地理的位置からみて大和朝廷の東国経営における陸上交通の要衝であったことはまず間違いあるまい。

東国経営のための交通路に関しては、前川明久氏(23)が直木孝次郎氏(24)の説を補足して次のように論じておられる。

安閑・宣化両朝と欽明朝とが対立していたという前提で、この頃さかんになる大和朝廷の東国経営に対して、前者の側は尾張氏と深くつながりがあるので（両天皇の母は尾張氏の子媛である）安全な陸路を通ることができたのであるが、後者は尾張国を通ることができず、危険な海路をとらねばならなかったとするのである。そして、陸路交通の要地にあった尾張氏祭祀の熱田神宮と、南伊勢経由の海路交通の要地にあった伊勢神宮とがそれぞれ重要な位置をしめるようになり、互いに発展したと考えられたのである。伊勢湾沿岸に立地するという共通点をもつ伊勢神宮と熱田神宮の発展の起源を大和朝廷内部での勢力争いとかからみあわせて考えておられ、しかも伊勢神宮と熱田神宮とが対立して発展したという点などなかなか興味深い説である。しかし、前川氏は熱田神宮の起源を研究する上で避けることのできない尾張氏についての検討をされているにもかかわらず、尾張氏と海部との深い関係については一切触れられていないのである。

尾張氏が海部と深い関係にあり、おそらく伊勢湾の制海権をにぎっていたらしいことは尾張氏の職掌のところで述べたが、そのような尾張氏が尾張国を支配したいたのであるか

ら、尾張氏は東国への陸路のみならず、海路までも牛耳っていたと考えられるのである。大和朝廷が東国経営をするにあたって、尾張国と伊勢湾を支配する尾張氏は無視できない存在であったろう。

このように考えるなら欽明朝側は東国経営にはほとんど参加することはできなかったと考えられる。あるいは両朝の対立は、安閑・宣化側が東国を欽明側が西国を基盤としていたとも考えられる。

さて、このように尾張氏は朝廷から重要視されていたわけだが、尾張氏が多くの后妃伝承を有することやヤマトタケル(25)伝承におけるミヤズヒメ(26)の通婚、その他県分布の東限が尾張国であること(27)などから、尾張氏は早くから大和朝廷の勢力圏に含まれていたらしく、両朝の対立のような特別な事情がない限り、尾張国は大和朝廷の東国への玄関の役割を果たしていたようである。

2. 熱田神宮の役割

熱田神宮の起源については依然不明といわねばなるまいが、ここでは熱田神宮の果す役割について少し推考してみたい。

熱田神宮は尾張氏にとっては氏神であったのであろうが、大和朝廷にとってはいかなる存在であったのだろうか。

熱田神宮は『書紀』景行天皇八月条に初出する。社名の由来については『熱田縁記』では自然炎焼した楓樹が倒れて水田が干からびたので熱田とし、『釈日本紀』巻七の「尾張国風土記逸文」では郷名に由来するとする。熱田神宮に関する伝承には、このほかにも差異がみられるが、熱田神宮の起源については伝承上ではヤマトタケルが残していった草薙剣に端を発する点で共通している。

草薙剣はもとの名を天叢雲剣といい、スサノオ(28)が八岐大蛇を退治したときにその尾から出てきたとする三種の神器のひとつと考えられているものである。ヤマトタケルが伊勢のヤマトヒメ(29)から草薙剣をもらいうけ、東征において随時携帯し、尾張のミヤズヒメのもとに残し、後に熱田神宮に祭られたとされているのである。

ヤマトタケルやミヤズヒメの実在性についてここで触れるつもりはないが、ヤマトタケルの伝承からおそらく再三にわたって行われたのであろう大和朝廷の東国経営において、東国の豪族が大和軍に服属したあかしとして草薙剣に誓いをたてたのではないかと思うのである。もとより、実際に草薙剣というものに服属の誓いをしたかどうかは疑問だが、東国豪族のさまざまな大和朝廷への服属物語が、ヤマトタケルの東征物語で統一化されるとともに草薙剣への誓いという統一化も朝廷によって作為されたのではなかろうか。そして、時がたつにつれて史実化され、草薙剣の重要性が朝廷にとっても東国の豪族にとっても増してきたのではなかろうか。そしてその草薙剣は尾張国熱田神宮に祭られているのである。

ヤマトタケルやミヤズヒメの実在性についてここで触れるつもりはないが、ヤマトタケ

ルの伝承からおそらく再三にわたって行われたであろう大和朝廷の東国経営において、東国の豪族が大和軍に服属したあかしとして草薙剣に誓いをたてたのではないかと思うのである。もとより、実際に草薙剣というものに服属の誓いをしたかどうかは疑問だが、東国豪族のさまざまな大和朝廷への服属物語が、ヤマトタケルの東征物語で統一化されるとともに草薙剣への誓いという統一化も朝廷によって作られたのではなかろうか。そして、時がたつにつれて史実化され、草薙剣の重要性が朝廷にとっても東国の豪族にとっても増してきたのではなかろうか。そしてその草薙剣は尾張国熱田神宮に祭られているのである。

尾張国の重要性はその位置にあった。大和朝廷は東国への守りとして三関を置いたが、関は言わば「点」であり人の力で守ることのできる砦である。しかし、尾張国はその大部分が平野であり、どこを通っても東国へ行くことができるが逆にどこからも畿内に侵入できるのである。このような「面」を人の力で守ることはむずかしい。そこで、大和朝廷は神の力で守ることを考えたのではなかろうか。すなわち草薙剣である。大和朝廷が一地方豪族である尾張氏の奉斎する熱田神宮の神体草薙剣を極めて重要視しているのは、このような精神的な政策があったからであろう。東国の豪族が大和朝廷に対抗するために尾張国を越えることは草薙剣にさからうことでもあったのである。また、海路をとって畿内に侵入することも同様であったろう。

3. 草薙剣をめぐる

草薙剣は八岐大蛇の尾より出て、天孫降臨に随伴されて天皇のもとにあったのだが、後に伊勢に移され、ヤマトタケルの東征の後に尾張に置かれた。そして天智朝に僧道行によって盗まれたが取り返えされ、天武朝には宮中にあり、天武天皇の晩年に熱田神宮に返されるという経略をたどる。

『古事記』・『書紀』にはこのように草薙剣にまつわる伝承が多数見受けられ、三種の神器のひとつにふさわしい神剣であったことがわかる。

ところで、草薙剣が死をもたせた人物が二人いる。ヤマトタケルと天武天皇である。

ヤマトタケルの伝承では、熱田の地にいかにすれば草薙剣を置くことができるかと、『古事記』・『書紀』の編者は相当苦心したようである。『古事記』においては二度も尾張に立ち寄らなければならないのである。（『書紀』では伊勢から尾張をとばしていきなり駿河に至っている。海路をとったと考えられないことはないが、このあたりの制海権は前述したように尾張氏にある。また、帰路に尾張に立ち寄る記事には「日本武尊、更還於尾張」と「還」の字がつかわれていることから以前尾張を通ったことを示すものと考えられる。）そして伊吹山の神の言向けの際に草薙剣を熱田に置き留めるために携帯させないのである。

ここで興味をひくのは尾張氏と伊吹山との関係である。伊吹山は近江国坂田郡の東北、美濃国からみれば不破郡の西北に位置する。伊吹山の南麓には、東より伊富岐神社（不破郡垂井町伊吹）・伊吹神社（坂田郡伊吹村上平寺）・伊夫伎神社（坂田郡伊吹村伊吹）の三社が鎮

座する。これら三社を奉斎する氏族は、美濃国に勢力をもつ伊福部氏であろうと考えられている(30)。ということは伊吹山の神がヤマトタケルを死においやるという伝承は、伊吹山周辺を基盤とした伊福部氏の大和政権への反抗と考えられる。

ところで、伊福部氏は表①を見ればわかるように尾張氏と同族なのである。尾張氏はヤマトタケルにミヤズヒメを嫁がせており、これは尾張氏の大和政権への服属伝承と考えられる。また『書紀』に「而淹留踰月」とあるように、ヤマトタケルにとって尾張は安息の地ですらあったようである。このように尾張氏と伊福部氏は同祖氏族であるにもかかわらず、大和政権への対処の仕方が全く反対であったのは不思議である。(これに関しては検討をする余裕がなかったので、指摘にとどめたい。)

さて、次に天武天皇と草薙剣の関係について考えてみよう。『書紀』の記述からすれば、天武朝には草薙剣は宮中に置かれていたらしい(31)。ここで問題になるのは、天武天皇の死因が草薙剣の祟りにあるという『書紀』の記述である。天皇の位のしるしである三種の神器のひとつである草薙剣が天皇に祟るとはどういうことなのであろうか。草薙剣を本来祭っていた尾張氏の不満のあらわれであらうか。しかし、尾張宿禰大隅(32)や尾張連馬身(33)らは、壬申の乱の功臣として厚遇されているのである。

ヤマトタケルも天武天皇も行軍した点で共通する。ヤマトタケルは草薙剣を手放し、天武天皇は草薙剣に祟られたのである。皇位継承のしるしのひとつである草薙剣を手放したもたには死がまっていた(34)。また、三種の神器に見放された天皇にも死が待っていたと考えられるべきであらうか。

第四章 尾張氏と皇室および中央豪族とのつながり

1. 皇室とのつながり

尾張氏が多くの后妃伝承をもつことは知られている。『古事記』・『書紀』によれば、孝昭・孝元・崇神・継体の后妃がそうであり、そのほかにもヤマトタケルの妃であるミヤズヒメ(35)や応神天皇の三妃の母も尾張氏の出自(36)である。これらの后妃伝承の中で継体妃目子媛以外は疑う向きが強いが、いずれにしろ后妃伝承を多く残せるだけの尾張氏の力は評価されるべきである。后妃を出せた理由としては職掌のところで触れたように、内廷と関係をもったことや後宮(37)に采女を入れたことなどが考えられる。また、尾張氏の後妃伝承で特徴的なのは、ある時代に集中的に后妃を出しているのではなく、まばらに登場している点である。外戚としての権力がそれほど強くなかったためであらうか。

2. 中央豪族とのつながり

①葛城氏とのつながり

これについては尾張氏の本拠とのところで少し触れた。尾張氏の一部が葛城に住むようになり、葛城氏と通婚関係をもったのであろう。そしてこのような関係をもった時期は、葛城氏の最盛期である仁徳朝頃と考えられる。

尾張氏が地方豪族である以上、その地位を維持し発展していくためには、皇室はもちろんのこと、時の権力者である中央豪族にも取り入る必要があった。葛城との通婚もそのような手段のひとつであったのだろう。だが、葛城氏は雄略朝頃に没落してしまうのである。

②物部氏とのつながり

葛城氏にかかわって台頭してきたのは大伴氏や物部氏である。尾張氏と大伴氏とをつなぐ史料は管見によるかぎりみあたらないが、尾張氏と物部氏とのつながりは従来考えられているよりも密接であったのではなかろうか。

『和名抄』によれば、物部郷の分布は東国八・西国六（越後・丹波・丹後など畿内近国を除く）であり、『延喜式』神名帳にのる物部を冠する神社は東国11・西国6である。また、六国史から居住地または本貫のわかる物部をみると東国12・西国6となり、国造の分布は東国7・西国4となる。ちなみに東国で物部とのかかわりをうかがわせる国を列記すると、伊勢・尾張・駿河・相模・常陸。下総・近江・美濃・甲斐・三河・武蔵・上野・下野・越前・越中・越後・佐渡となる。

直木孝次郎氏(38)は物部が東国に多い事実を、大和朝廷の東国経営にともなって物部が扶植されたためと解釈された。もしそう考えることが許されるならば、東国経営の推進のために物部氏は東国への要地である尾張国を安全に通行する必要が生じてくる。そこで物部氏と尾張氏との何らかの提携が行われたのではあるまいか。物部氏は東国経営の安全のために、尾張氏は物部氏を通じて中央政界への進出のために相互に利用したのではなかろうか。

物部氏と尾張氏との関係をうかがわせる史料としての『旧事紀』がある。その「天孫本紀」において物部氏と尾張氏とを同祖とするのである。両氏の祖は天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊であるが、従来からこれについては両氏の系譜を結合した偽作であると考えられている。その論拠としては、『古事記』・『書紀』には尾張氏の祖である火明命は神代に、物部氏の祖である饒速日命は神武朝にそれぞれ別の神として登場すること、また『姓氏録』には物部氏は天神、尾張氏は天孫と分類されていることなどがあげられている。このほかにも「天孫本紀」の系譜において両氏の世代のずれが著しいことから系譜の結合をうかがうことができる。（たとえば、両氏の15世孫の時代をみると、尾張氏は履中の時代であるのに対して、物部氏は推古の時代まで降るのである。単純に考えても16代約2世紀の開きがある。）

このようにみてくると系譜の結合が行われたことはかなり有力になってくる。しかし、注

意しておきたいのは、仮にこの系譜が偽作であったとしても物部氏と尾張氏が、擬制的にしる同祖関係を持とうとしたことである。『旧事紀』は物部氏の立場から書かれたとするならばこの系譜結合が行われたのは、『旧事紀』のできた平安初期よりかなり以前のことであろう。なぜなら、律令国家での尾張氏は下級官人にしかなれないほど衰弱していたからである。

さて、尾張国と物部氏についてみると、『和名鈔』に愛知郡物部郷がみえ、『延喜式』神名帳によると春部郡と愛知郡に物部神社がみえ、尾張国にも物部氏の力が及んでいたらしいことがわかる。愛知郡・春部郡は尾張国の中でも特に尾張氏とのつながりの深い地であるだけに、そこに物部氏の痕跡がみられることは、さきの尾張氏と物部氏との提携があったのではないかという考えに示唆的である。

このほかにも物部氏と尾張氏が継体天皇擁立の際に関係をもったとする説(39)がある。

物部氏の東国における最有力拠点のひとつに美濃西部があり、そこは近江坂田と尾張との中間に位置することから物部氏が継体天皇と尾張氏の提携の仲介役を果たしたとするのである。これを裏づけるものとして、物部氏が仁賢皇女手白髪直系が中絶する敏達朝を境に没落していることをあげているのである。

史料制約もあって物部氏と尾張氏の関係に決定的なことは言えないが、両方とも東国経営において重要な役割を担っていたらしく、両者の提携は考えられてよいのではないだろうか。

③蘇我氏との関係

尾張氏と蘇我氏の関係を示す史料は、前述した蘇我大臣稲目が尾張連を尾張国の屯倉の管理につかわせた記事があるくらいである。そのほかに蘇我氏との関係をうかがわせるものはないが、尾張氏の同族に棕連があることから、「クラ」を通じて蘇我氏と結びついていたのかもしれない(40)。しかし、尾張氏は蘇我氏の全盛期にはほとんど史上にあらわれない。物部氏の没落とともに尾張氏も没落していったのであろうか。

律令国家での尾張氏は、下級官人にしかなれないほどであったが、その原因のひとつに藤原氏とのつながりが薄かった点があげられよう。(上毛野氏が母系で藤原氏とつながり、発展していったのと対照的である。)

おわりに

古代の尾張氏について、一通りみてきたが、種々の問題について決定的な論を展開することは史料制約もあって難しく、推論を有機的にできるだけ構成しようと努めるほかない状態であった。

尾張氏と東国との関係の研究は今後の課題である(41)。